

家政学広報におけるブックレット『家政学のじかん』の可能性(第2報): 大学生が抱く家政学のイメージ

著者	花輪 由樹, 小倉 育代, 大本 久美子, 表 真美, 岸本 幸臣, 長石 啓子, 宮崎 陽子, 吉井 美奈子
著者別表示	Hanawa Yuki, Ogura Ikuyo, Ohmoto Kumiko, Omote Mami, Kishimoto Yukiomi, Nagaishi Keiko, Miyazaki Yoko, Yoshii Minako
雑誌名	家政学原論研究
巻	47
ページ	30-38
発行年	2013-08-19
URL	http://doi.org/10.24517/00062771

doi: 10.20596/jphe.47.0_30



研究ノート

家政学広報におけるブックレット『家政学のじかん』の可能性 (第2報)

—大学生が抱く家政学のイメージ—

花 輪 由 樹 (京都大学)
小 倉 育 代 (大阪女子短期大学)
大 本 久美子 (大阪教育大学)
表 真 美 (京都女子大学)
岸 本 幸 臣 (羽衣国際大学)
長 石 啓 子 (元くらしき作陽大学)
宮 崎 陽 子 (羽衣国際大学)
吉 井 美奈子 (武庫川女子大学)

原稿受付 平成25年2月28日; 原稿受理 平成25年7月2日

The Usefulness of Book-let “kaseigaku no Jikan” for the Publicity of Home Economics

: the Image about Home Economics in University students

Yuki HANAWA*¹, Ikuyo OGURA*², Kumiko OHMOTO*³,
Mami OMOTE*⁴, Yukiomi KISHIMOTO*⁵, Keiko NAGAISHI*⁶,
Yoko MIYAZAKI*⁵ and Minako YOSHII*⁷

*Kyoto University*¹, Osaka Women's Junior College*², Osaka Kyoiku University*³,
Kyoto Women's University*⁴, Haboromo University of International studies*⁵,
Kurashiki Sakuyo University*⁶, Mukogawa Women's University*⁷*

(Received February 28, 2013; Accepted in received form July 2, 2013)

Keywords キーワード: book-let ブックレット, university students 大学生, home economics 家政学, image イメージ

1. はじめに

1) 研究背景と目的

家政学の学問的發展には、学問的検討に加えて、家政学を身近に認知してもらうことが重要である。本研究は、生活事例を用いて分かりやすい家政学の紹介を試みたブックレット『家政学のじかん』¹⁾(関西家政学原論研究会2011)の家政学広報としての可能性や課題を探ることを目指している。ブックレットはA5版で8章か

ら成り、総数96頁となっている。各章のタイトルは表1に示したとおりであり、主に家族や家庭生活を中心としたテーマを取り上げている。このブックレットは2011年6月発行後、全国の大学で授業の副読本として使用されてきた。本研究ではブックレットの読後の意識を知るために、関東・関西・中国地区の6大学で家政学や家庭科、栄養教諭関連の授業の受講者を対象に、質問紙調査を行った。[第1報]では質問紙調

査の結果の全体像を報告している。[第2報]の本稿では、大学生が抱く家政学のイメージについて読後の意識変化の分析を行うことで、ブックレットの役割と可能性を探ることを目的とした。

2) 方法

調査時期は2011年10月～12月で、調査方法は集合法による自記式質問紙調査の手法を取った。質問内容は、①読んだ章と最も興味を持った章、②最も興味を持った理由、③読後の生活変化、④読後の感想、⑤家政学の認知、⑥読む前の家政学への興味、⑦読後の家政学への興味、⑧家政学へのイメージ、⑨家政学の役立ち感、⑩家政学に関する授業の受講有無の計10項目である。そのうち本稿では、【問8「家政学」という学問についての印象(イメージ)について自由に書いてください】の回答に注目して分析した。なお全体の有効回収票は401票であり、そのうち女子378名・男子12名(不明・無回答11名)、1・2・3・4回生は各々21.7、44.6、13.0、17.5(不明・無回答3.2)%であった。また問8の回答数は381票であり、そのうち女子365名・男子11名(不明・無回答5名)、1・2・3・4回生は各々21.1、46.7、12.3、18.0(不明・無回答1.8)%であった。

分析方法は、まず家政学の典型的な用語がどのような割合であげられているかを用語検索による量的調査で把握し、次にそのキーワードが出現する文章中に、家政学へのイメージがどのように現れているかを文脈分析による質的調査で明らかにする中で、ブックレット読後の変化にも注目した。

[第1報]では、検索用語として15個(1家政学、2家庭科、3生活、4家族、5親、6結婚、7夫婦、8別姓、9子育て・育児、10ジェンダー、11仕事、12家事、13地域、14住まい、15高齢・加齢)の用語が選定されたが、本稿ではさらにブックレットの各章のキーワードと考えられるものを用語検索単位で33個選定した(表1)。その上で家政学の典型的な用語も補足²⁾し、計56個の用語から家政学のイメージに関する量的分析を行った(表2)。

表1 『家政学のじかん』各章のタイトルとキーワード

序章: 生活すること—家庭生活 のための社会の発展—	生活 家庭・家庭生活 家政・家政学 親
1章: あなたの「今」を『家族』からみ つめる—あなたにとって家族と は?—	家族 結婚 家 子
2章: あなたの「今」を『親子関係』から みつめる—子育てはつらい? 思春期の親と子の人間関係—	子育て・育児 親 支援
3章: あなたの「今」を『制度』からみ つめる—結婚てなに?夫婦別 姓からみる結婚のカタチ—	制度 別姓 夫婦
4章: あなたの「今」を『ジェンダー』から みつめる—「育メン」ってな に?家事分担—	ジェンダー 育メン 性別役割分業 育児休業 家事 専業主婦 家庭科
5章: あなたの「今」を『地域』からみ つめる—「こどものまち」ってな に?「思いやり」のあるまちづく り—	地域 まち 遊び 仕事 つくる
6章: あなたの「今」を『住まい』からみ つめる—人間らしい暮らしを問 い続けよう—	住 人間らしい 暮らし
7章: あなたの「今」を『加齢』からみ つめる—歳をとると食事はどう なる?Co-食のすすめ—	加齢・高齢 食 買い物 介護

3) 先行研究と本研究の位置づけ

これまで家政学のイメージに関する研究は、衣³⁾ 食⁵⁾ 住⁷⁾ などの具体例を通じたイメージ研究はいくつかあるものの、家政学のイメージに直接言及している研究は、藤田(2012)⁹⁾にみられるのみである。

藤田は、細分化・専門化する今日の家政学が、学問としての意義の理解を軽薄にしているとして、家政学部生に家政学のイメージ調査を行い、そこで何が認識されているかを明らかにすることで、家政学の学びへの示唆を得ようとした。しかしここで対象とされていたのは、某女子大学家政学部生82名(家政学原論履修者)であり、本研究とは以下の点で異なる。まず藤田の研究と比較して、調査対象者の人数が4倍近く(401

人)あり,対象大学数も6大学と幅広く,そしてブックレット使用による家政学のイメージ変化を具体的に検証できることなどが,本研究の特徴としてあげられる。

2. 量的分析の結果及び考察

質問紙調査による【問8家政学のイメージ】の回答結果から用語の量的分析を行った結果,圧倒的に「1.生活(4割弱・139人)」の用語が多くみられた(表2)。以下では表1のブックレットキーワードとの比較(2-1),学習内容・学習者・価値づけごとの分析(2-2)を行っていく。

2-1. 表1ブックレットキーワードとの比較

1) 上位用語の特徴

表2で上位5つにみられた用語は「1.生活(4割弱・139人)」「2.家庭科(2割弱・67人)」「3.家族(2割弱・64人)」「4.家政・家政学(2割弱・61人)」「5.食(2割弱・61人)」であった。これらは全て表1のブックレットで取り上げられていたキーワードである。ブックレットでは,家政学が人間生活の基本である家庭生活の視点から社会のあり方を考えることを全体的に主張しており,家政学として伝えるべき重要用語が,量的調査においても大学生のイメージの中に描かれている結果となった。

2) 表1になかった用語

今回ブックレットで網羅できなかった「9.衣」の分野について,特に取り上げていないにも関わらず,「9.衣(1割強・51人)」「16.裁縫・被服(1割弱・35人)」の用語をイメージとしてあげている者が多数存在した。これはブックレットの影響は受けずに家政学へのイメージを潜在的に持っていた例として注目できる。

3) イメージされなかった用語

表1のブックレットでキーワードに設定していたにも関わらず,1人もイメージの対象としてあげていなかった用語は,「51.支援」「52.育メン」「53.性別役割分業」「54.育児休業」「55.買い物」「56.遊び」であった。このことからブックレットで重視されているキーワード全てが家政学のイメージとして重なるわけでは

表2 量的分析による家政学のイメージランキング (n=381,単位:%,複数回答,黒塗は表1の用語)

番号	検索用語(括弧内は内訳)	人	%	順位
1	生活(家庭生活を除く)	139	36.5	1位
2	家庭科	67	17.6	2位
3	家族	64	16.8	3位
4	家政(5)・家政学(56)	61	16.0	4位
5	食	61	16.0	4位
6	女	59	15.5	6位
7	住	56	14.7	7位
8	家庭(家庭生活と家庭科を除く)	52	13.6	8位
9	衣	51	13.4	9位
10	衣食住	43	11.3	10位
11	料理(20)・調理(12)・栄養(8)	40	10.5	11位
12	身近(28)・密着(5)・つながり(4)	38	10.0	12位
13	幅広い(16)・広い(26)・全般(12)	38	10.0	12位
14	必要(37)・不可欠(8)	38	10.0	12位
15	生きる	36	9.4	15位
16	裁縫(23)・被服(12)	35	9.2	16位
17	家庭生活	32	8.4	17位
18	地域	26	6.8	18位
19	家事	22	5.8	19位
20	大事(4)・大切(15)	19	5.0	20位
21	暮らし	18	4.7	21位
22	役立つ	18	4.7	21位
23	子育て(4)・育児(8)	12	3.1	23位
24	よりよい	12	3.1	23位
25	重要	11	2.9	25位
26	福祉	10	2.6	26位
27	親	9	2.4	27位
28	黨	9	2.4	27位
29	人生・一生	9	2.4	27位
30	ジェンダー	7	1.8	30位
31	結婚	6	1.6	31位
32	制度	5	1.3	32位
33	学際的・総合的	5	1.3	32位
34	実学・実際	5	1.3	32位
35	子	4	1.0	35位
36	消費	4	1.0	35位
37	経済	4	1.0	35位
38	まち	2	0.5	38位
39	夫婦	2	0.5	38位
40	家	2	0.5	38位
41	加齢(2)・高齢(0)	2	0.5	38位
42	仕事	2	0.5	38位
43	人間らしい	2	0.5	38位
44	介護	1	0.3	44位
45	花嫁	1	0.3	44位
46	良妻賢母	1	0.3	44位
47	専業主婦	1	0.3	44位
48	別荘	1	0.3	44位
49	生産	1	0.3	44位
50	つくる	1	0.3	44位
51	支援	0	0.0	51位
52	育メン	0	0.0	51位
53	性別役割分業	0	0.0	51位
54	育児休業	0	0.0	51位
55	買い物	0	0.0	51位
56	遊び	0	0.0	51位

ないことがいえる。またこれらは、女性の社会進出や共働き、子育て等、現代社会の課題として家庭科や家政学でも多様に扱われる用語の1つではあるが、今のところ家政学から連想される用語としては定着していないことが分かった。

2-2. 学習内容・学習者・価値づけに関する分析

1) 学習内容について

表2を学習内容ごとにみると、用語の頻出度をみる限りでは、衣食住へのイメージが上位を占めている。特に「5. 食(2割弱・61人)」「11. 料理・調理・栄養(1割強・40人)」など食関連へのイメージが強く、また「9. 衣(1割強・51人)」「16. 裁縫・被服(1割弱・35人)」など衣関連へのイメージが、そして「7. 住(1割強・56人)」という順にみられる。ブックレットでは「食」や「住」については触れたものの、「衣」に関しては取り上げなかった。しかしながらこのように多くの人々が衣関連の用語を連想していることから、このイメージがどのような認識過程で形成されたのか疑問が残る。これについては3-2で述べていく。

また衣食住の学習内容に続いて「23. 子育て・育児(12人)」「26. 福祉(10人)」などもみられるのに対し、「41. 加齢・高齢(2人)」「44. 介護(1人)」へのイメージが極端に低いことから、高齢者関連の用語は、家政学とは直接連想しにくいことが考えられる。

2) 学習者について

誰が学ぶ対象であるのかを考えた際に、「6. 女(2割弱・59人)」の用語に注目すると、これは上位5番目に位置しており回答数が多いといえる。一方、「6. 女」の関連用語であり、従来の家政学のイメージと考えられるような「45. 花嫁(1人)」「46. 良妻賢母(1人)」「47. 専業主婦(1人)」については、回答数は皆無に近かった。このことから多くの人々は、家政学と「6. 女」は何らかの関連があるととらえているが、「45. 花嫁」「46. 良妻賢母」「47. 専業主婦」など、家事担当者としての女性については、家政学のイメージには入っていないことが分かる。「6. 女」についての回答

内容は、さらに詳細をみる必要があるため、3-3で述べていく。

3) 価値づけについて

副詞・形容詞などに注目すると、いずれも1割程度であるものの衣食住の用語と並び「12. 身近・密着・つながり(1割・38人)」「13. 幅広い・広い・全般(1割・38人)」「14. 必要・不可欠(1割・38人)」が12位と比較的上位に位置している。また「20. 大事・大切(1割弱・19人)」「22. 役立つ(1割未満・18人)」「24. よりよい(1割未満・12人)」「25. 重要(1割未満・11人)」の用語も順に続く。「14. 必要・不可欠」「20. 大事・大切」「22. 役立つ」「25. 重要」の用語は自分自身の家政学への評価を示すものであり、家政学の内容を自分なりに解釈していなければ現れてこない言葉であるといえよう。このような価値づけが、ブックレット読後に生まれたものかどうかは今回の調査では不明だが、ブックレットを読んで家政学への価値づけが行われた可能性は大いに考えられる。これについては3-4で述べる。

2-3. 小括

本項の量的調査で明らかになった家政学のイメージは、1. ブックレットを読んだ後の影響もしくは2. それまでの既存知識や授業からの影響の2通りが考えられる。しかし[第1報]の調査結果によると、全体の7割近くが家政学への認識がなかったことを示しており、つまりこれは多くの学生がブックレットによる影響を受けて家政学を知り始めた可能性が高いことを示している。そしてその真相は、どのような文脈で用語が使用されているのかをみることによって明らかになると考える。

そこで本章での課題、①家政学として伝えるべき重要用語が大学生の中にどのようにイメージされているのか(2-1.1)、②なぜ「衣」に関する用語が多くみられるのか(2-1.2)(2-2.1)、③「女」は学習者として語られているのか(2-2.2)、④家政学への評価はブックレット読後に行われたものか(2-2.3)、についての上記4点を次章で明らかにしていく。

3. 質的分析の結果及び考察

本項では、前章での量的調査による課題4点を手掛かりに文脈分析を行った(表3)。なお[①家政学の重要用語]については、量的調査の上位3つの用語である1)「生活」、2)「家庭科」、3)「家族」を対象とした。

3-1. 家政学の重要用語

1) 「生活」

「生活」がどの範囲を指すものかを明らかにするため、表2の「1. 生活」を「8. 家庭」との組み合わせで分析した(表3)。まず[1. 家庭生活に触れずに「生活」をとらえている者](123人)は、[2. 家庭生活との関連で「生活」をとらえている者](63人)の約2倍存在しており、圧倒的に多くの人々が、家政学をとらえる上で「家庭」よりも、「生活」の用語を選んでいることが分かった。

また[1. 家庭生活に触れずに「生活」をとらえている者]を詳しくみると、3パターンの傾向があり、家政学を生活のための学問とする[①目的型](54人)、家政学と自分との距離から学問をとらえる[②距離型](42人)、具体的な学習内容を提示することで学問をとらえる[③内容提示型](27人)がみられた。

また[2. 家庭生活との関連で「生活」をとらえている者]については、家庭に向かおうとする意識を持つ[①求心型](23人)、家庭という身近な場所から外に向かって発展する生活の広がりを持つ[②拡大型](12人)、家庭生活と、家庭生活よりも広い生活を並列的にとらえる[③並列型](26人)が存在した。こ

表3 質的分析による家政学のイメージの傾向

(複数回答有)

分析視点		分析結果		人数
3-1 1)生活	1. 家庭生活に触れずに「生活」をとらえている者(123人)	①目的型	不可欠・必要	18
			重要・大事	13
			豊かさ・よりよさ	13
		②距離型	役立つ	10
			身近・密着・つながり	18
			多方面・全般・幅広さ	18
	③内容提示型		その他	6
	2. 家庭生活との関連で「生活」をとらえている者(63人)	①求心型		27
		②拡大型		23
		③並列型		12
④どちらでもない		26		
3-1 2)家庭科	1. 家庭科のようなもの・家庭科の一部(34人)	①家庭科そのもの		2
		②家庭科のようなもの		16
		③家庭科の一部		13
	2. 家庭科の延長・発展(19人)	①家庭科の延長		5
		②家庭科の学問的内容		10
		③家庭科の発展的内容		6
	3. 家庭科とは違う(14人)	①家庭科とのイメージが変化した		3
		②家庭科とは明らかに違う		8
		③家庭科とは少し違う		4
				2
3-1 3)家族	1. 家族以外の分野も共に学ぶ(39人)	①非並列型	家族を中心に他分野を学ぶ	3
			家族と社会との関わりを学ぶ	10
		②並列型	日常生活の中の1つ	3
			幅広く学ぶ中の1つ	10
	2. 家族に注目して学ぶ(25人)	①家族関係・つながり		13
		②家族のこと		10
3-2 「衣」	1. 「衣・被服・裁縫」		15	
	2. 「衣・被服・裁縫」×「食」		4	
	3. 「衣・被服・裁縫」×「住」		16	
	4. 「衣・被服・裁縫」×「食」、「住」等その他		2	
3-3 「女」	1. 女性学習型(36人)	①家の仕事・生活に必要な		21
		②女性の専門・研究者の関心、女子大との関連		10
		③女性のサポート・活躍に必要な		10
		④家庭科との関連		5
		⑤男性との比較		4
		⑥現状との関連		4
	2. 男女共習型(5人)		3	
	3. 考え方の変化型(12人)	①今後の変化が予測される		5
		②男女共に学ぶべき		6
		③全ての人が学ぶべき		4
		2		
4. その他(6人)		6		
3-4 読後のイメージ変化	1. 学習内容(32人)	①拡がり・視点の追加		6
		②追加		23
		③変化内容不明		7
	2. 学習者(14人)	①女→男女		2
		②女→全ての人		7
		③変化内容不明		6
	3. 価値(35人)	①変化		1
		②追加		8
		自分のこと		19
		社会/一般的なこと		8

こには、家政学を学ぶ目的の差異が示されており、①が家庭生活に収斂する学びになっているのに対し、②③は家庭だけでなくその生活の広がり全体を重視しているものと推察される。

この結果は、家政学が家庭に向かって生活をとらえさせるのか、もしくは家庭生活を中心に外に向かって生活をとらえさせるのか、もしくは

は家庭も家庭外も並列的にとらえさせるのかという学問的課題を物語っているともいえる。

2) 「家庭科」

「家庭科」の用語は「生活」の次に多い2番目の順位(67人・17.6%)でみられた。そこには家政学を「1. 家庭科のようなもの・家庭科の一部」と考える者(34人), 「2. 家庭科の延長・発展」と考える者(19人), 「3. 家庭科とは違う」と考える者(14人)の3パターンがみられた。1. と2. は家庭科と何らかの関連があることを示しており, さらに1. の中には「①家庭科そのもの」と述べる者(16人)がいる一方で, 3. では「②家庭科とは明らかに違う」(4人)と考える者もいる。「1-①家庭科そのもの」と答える者は小中高の家庭科との内容を重ねているものが多く, 一方, 「3. 家庭科とは違う」と答える者は家政学が「人間の生活に関する」学問であることや「生きていく上で必要な事柄を」「深く専門的に学ぶため」「それなりに知識が必要」である点で違いがあると述べている。

また「3. 家庭科とは違う」と答える者の中には, ブックレットの読後に考えを変化させた者もあり, そこには, <「家庭内」「家庭外」のことを扱う/「体系化された」「私達の生活に直結する学問」/「家族・地域」分野の発展/「人間関係」「親子の絆」などを学べる学問/小中高の家庭科よりも「さらに広く, 生活に直結した学問」>など, 自分自身の生活と直結しながらも家族や家庭だけに限定せず広く生活をとらえるのが家政学であると考えていることが分かる。

以上より, 家政学と家庭科のとらえ方について, 両者に何らかの関連があると考えられる者は圧倒的に多く存在する(計53人)ものの, 「家庭科そのもの」や「家庭科とは違う」という両極端の意見も存在することから, 家庭科を連想する場合には人によって家政学との関連に解釈の差異がみられることが明らかになった。

3) 「家族」

家政学の最重要用語の1つである「家族」は, 量的調査において3番目の順位(64人・16.8%)

で現れていた。その中身は大きく2つの傾向があり, 家政学が「1. 家族以外の分野も共に学ぶ」と考える者(39人)と, 「2. 家族に注目して学ぶ」と考える者(25人)に分けられる。

「1. 家族以外の分野も共に学ぶ」では, 家族の位置づけが①非並列的(13人)②並列的(26人)の2つがある。①は「家族」に重きが置かれた考えであり, 「家族を中心に」他分野を学ぶ姿勢(3人)と, 「家族と社会との関わり」を学ぶ姿勢(10人)がみられる。それに対して, ②は多くの分野を並列的に表記しており, その中の1つに「家族」があるという態度がみられる。

「2. 家族に注目して学ぶ」では, 家政学が家族に着目した学問であるとの考えを持ち, 特に①家族関係や家族とのつながりを学ぶと考える者(10人)と②「家族のこと」「家族について」学ぶとシンプルに表現している者(15人)がみられた。

以上より, 家政学が家族を中心に他分野を同心円的に学ぶ考えをもつ者は少なく(3人), むしろ多分野を学ぶ中の1つととらえていたり(26人), 家族だけを学習内容として単体でとらえている傾向(15人)などがみられた。

3-2. 「衣」のイメージはどこからくるか

前章の量的調査では「衣」に関する用語がブックレットに掲載されていなかったにも関わらず, 比較的多く(51人・13.4%)の「衣」に関する用語がみられたことから, そのイメージがどこから来たのかを探る。まず「衣」(51人)の記載のうち, 「衣食住」の用語(43人)を除いた8人と, 「被服・裁縫」の35人を分析したところ(計43人), 「衣」の用語は単独で語られているわけではなく, 他の複数の用語と共に用いられていることが分かった。それは「1. 「衣・被服・裁縫」だけで述べている人(4人), 「2. 「衣・被服・裁縫」×「食」(16人), 「3. 「衣・被服・裁縫」×「住」(2人), 「4. 「衣・被服・裁縫」「住」等その他(21人)」という内訳からも分かる。

また「衣」のイメージが顕在化するきっかけとしては, 家庭科からの影響があるといえる。

実際に家庭科の影響を直接明記している者が11人（全体の4分の1）おり、具体的に小学校（3人）、小中学校（1人）、小中高（1人）、高校（1人）と学習過程までも述べている者がいた。

また最初は家政学のイメージを「衣」や「衣食」「衣住」と狭い範囲でとらえていた者が、ブックレットの影響により変化を見せていることも明らかになった。それは、家政学のイメージを①「衣・被服・裁縫」と答えていた4人のうち2人が、裁縫のイメージから他分野も意識できるようになったと述べており、このような変化型と思われる人は、計15人（全体の約3分の1）存在することが明らかになった。

以上より家政学において「衣」がイメージされる理由として家庭科が影響した可能性が高く、ブックレットの読後にはそのイメージが変化してより広くとらえていく例がみられた。

3-3. 学習対象者としての「女」であるのか

前章の量的調査では、「6. 女」の用語が上位5番目（2割弱・59人）に位置しており、本項ではそれが家政学の学習対象者として語られているのかどうかを探っていく。「女」の用語は文脈分析すると、[1. 女性が学ぶもの（女性学習型）] 36人、[2. 男女共に学ぶもの（男女共習型）] 5人、[3. 考え方を变化させた者（変化型）] 12人、[4. その他] 6人の4パターンがみられた。

[1. 女性が学ぶもの（女性学習型）] は全体の1割弱（36人）存在し、ここには[①家の仕事・生活に必要]であるので「女性が学ばざるを得ない」「学ぶべき」といった宿命的・義務的な思考や、[③女性のサポート・活躍に必要]といった肯定的な思考など、計6パターンの回答がみられた。前者の宿命的・義務的なイメージについては、「昔の家政学のイメージ」をはじめ「女子大の存在」「女性の研究者が多い」「家庭科との関連」「学習者の男性の人数との比較」といった回答からうかがえ、後者の肯定的なイメージは自分自身が家政学を学ぶ中で学問に期待や希望を抱いているような回答からみられた。

[2. 男女共に学ぶもの（男女共習型）] には、共に「学ぶことが望ましい」「学ぶべきだ」といった期待や責務が込められており、そこには女性の社会進出など社会情勢の変化や、現代社会で生活していく内容を男女が共に学ぶ必要があること等を理由としてあげていた。

[3. 考え方を变化させた者（変化型）] には、[①女性が学ぶべきと考えていたが今後そのイメージが変化しそうな人]（6人）、[②男女共に学ぶべき]と考えるようになった人（4人）、[③子どもから老人までの全ての人が学ぶべき]と性別の枠を超えてイメージ変化を遂げた人（2人）がいた。これらのイメージ変化はブックレットによる効果の1つといえるだろう。以上より、「女」の用語をあげている者のうち半数以上は女性が学ぶものと考えているが、約6分の1（11人）は現時点で男女共に学ぶべき・全ての人が学ぶべきと考えており、今後そのような考え方に变化すると見込まれる人も含めると約3分の1（18人）の人々が、家政学は女性だけの学問ではないと考えていることが明らかになった。

3-4. ブックレットの読後変化と家政学への評価

前章の量的調査では、「14. 必要・不可欠」「20. 大事・大切」「22. 役立つ」「25. 重要」等の家政学を自分なりに価値づける用語がみられ、本項ではこれがブックレットの影響であるかどうかを明らかにしていく。

まず【問8 家政学へのイメージ】の回答内容全体を、「読後の考え方の変化」を基準にして分析したところ、以下の4パターンがみられた。それは、I「～と思っていたが、～だと分かった」と明らかな変化が分かる回答（63人）、II「～と思っていた」と何らかの変化が分かる回答（26人）、III「知識やイメージ・印象」に関する回答（125人）、IV「～と思う、考える、重要、大事、必要、大切、役立つ、広い、深い、身近、密着、比較」といった家政学への価値や考えを「現在形」で示す回答（167人）である。この中で明らかな変化がみられるのはIであったため、これを対象にブックレットからの影響

を分析した。その結果、[1. 学習内容] (32人)、[2. 家政学の学習者] (14人)、[3. 家政学への価値] (35人) に関する変化がみられた。

[1. 学習内容] については、栄養、裁縫、家事など家庭内の「知恵」や「術」を学ぶと思っていたが、「生活」「暮らし」「多面性」など [①拡がり・視点の追加] (23人) を持つようになった者や、裁縫だけでなく栄養も重要といった、内容の [②追加] (7人) がみられる者もいた。

[2. 家政学の学習者] については、女性が学習すべきものと考えていたが、①男女共に学習すべき (7人)、②「全ての人」や「誰も」が考えるべき (6人) という考えへ変化していた。

[3. 家政学への価値] については、<苦手→役立つ/難しい→身近/不必要→大事/女性的・家庭的→フェミニスト、進歩的>といったこれまでの家政学への意識の [①変化] (8人) や、[自分のこと] (19人) や [社会や一般的なこと] (8人) についての価値観を [②追加] (27人) する例がみられた。[自分のこと] については、「将来」「今後」「日々の生活」といった自分の時間軸に家政学を重ね合わせて考えていた。また [社会や一般的なこと] では、「自分のためだけでなく、家族のため、地域のため、社会のための学問」「カテゴリーが結びついて」。 (例えば子育てにおける食事のことなど)、「何気ない普通の暮らしこそが、生活の大切な基盤」など家政学を学ぶ目的・効果・社会的役割を把握している者、家政学の枠組み理解に向かう者など、自分の立場を超えて社会的に家政学をとらえる価値観を獲得している様子が見られた。

以上より、I「～と分かった」と明らかな獲得系の表記をしている者の中に、ブックレットの影響による家政学への価値づけがみられた。しかし今回分析対象とはしなかった、IV「～と思う、考える…」といった現在形の表記の中にも価値づけの用語が多数みられたことから、家政学のイメージとして評価の意識は、全てがブックレットによる影響とは考えにくく、読書前か

ら既に家政学への評価の視点を持っていた人々もいた可能性がある。

3-5. 小括

本項の質的調査で明らかになった家政学のイメージは、同じ用語でも文脈が異なる中に、いくつかのパターン分けがなされ、それにより家政学が複数の方向性をもって把握されていることが明らかになった。また読後のイメージ変化については、今回の分析対象とした「変化が明白な者」の他に、「変化は曖昧だが自分の言葉に消化し表現していると考えられる者」もいたことから、読後の変化者がさらに存在する可能性があることが分かった。

4. まとめ及び課題

以上の調査内容をまとめると、①大学生が抱く家政学のイメージと、②ブックレットの読後にみられた意識変化、③ブックレットの可能性と課題について、以下のことがいえる。

①大学生が抱く家政学のイメージ

量的調査の用語検索では、家政学の重要用語とされる「生活」「家族」「家庭」が大学生の中でもキーワードとして意識されており、また学習内容に関するイメージでは「衣食住」があげられ、さらに「身近」「幅広い」「必要不可欠」といった家政学への評価用語も上位にみられた。一方、家政学の従来イメージの代表格と考えられる「花嫁」「良妻賢母」「専業主婦」の用語はほぼ皆無であった。また、ブックレットとの関係性については、「育児休業」「性別役割分業」などブックレットにはあるが、イメージとしては現れていない用語や、逆に、ブックレットにはないがイメージとして現れている「衣」関連の用語がみられた。

質的調査の文脈分析では、「家族」「家庭」「生活」の関係について、A. 家族や家庭生活に向かう形で生活全体をとらえる求心型、B. 家族や家庭を中心に生活をとらえる拡大型、C. 家族も生活も他分野も同列にとらえる並列型の3パターンがみられた。また「家庭科」については家政学と何らかの関連があると考えられる者が多く、ごくわずかではあるが家政学が「家庭科

そのもの」,「家庭科とは違う」という両極端の回答もみられた。またブックレットに掲載されていない「衣」分野のイメージは3分の1(15人)が家庭科の授業からの連想であると表記しており,自身の体験から家政学と家庭科のイメージが連想されていることがうかがえる。また「女」をあげている者の半数以上が,家政学は「女」の学ぶ学問と考えている者が,ブックレットの読後には3分の1(18人)の人々が,男女もしくは全ての人が学ぶべきという考えに変化していた。

②ブックレットの読後にみられた意識変化

ブックレットの影響と考えられる回答内容は, A. 学習内容の多面性や拡がりを示す意識, B. 男女共にあるいは全ての人が学ぶべきとする意識, C. 自分と家政学との関係, 社会における家政学の位置づけの両面から家政学の必要性を示す意識, がみられた。また「家庭科」と家政学との関連についても,「家庭科とは違う」と答える者の多くに,ブックレット読後の意識変化があったことも注目できる。

③ブックレットの可能性と課題

ブックレットを使用することで,家政学の多面性を理解させることができたり,また女子だけが学ぶ学問ではないことを感じさせたり,また読者自身の中に家政学の必要性を根づかせることができることを明らかにした。しかし質的調査によって明らかになった「家族」「家庭」「生活」との関係については,回答内容に3パターンの方向性(A. 求心型 B. 拡大型 C. 並列型)がみられたことから,ブックレットの内容構成として「家族」「家庭」「生活」の関係性を読者にどのようにとらえさせるかに曖昧さがあった可能性がある。しかしこれは現代社会における家政学の役割や位置づけにおいても更なる解明が求められる問題であり,家政学に関わる人全てが考えていかなければならない重要課題であると考えられる。この家政学の軸・方向性は,次回に企画する『家政学のじかん』でさらに精選させて提示できるようにしたい。

参考文献

- 1) 関西家政学原論研究会(2011)『ブックレット 家政学のじかん』城南印刷
- 2) 小倉育代, 宮崎陽子, 大本久美子, 表真美, 岸本幸臣, 長石啓子, 吉井美奈子(2009)家庭科教員の家政学認識と教育現場の課題, 家政学原論研究, 43, 30-37
- 3) 知念葉子, 伊神久美子, 木岡悦子(2004)着衣色によるイメージ形成と着装感: 脳波にみる快適因子との関わりから, 日本家政学会誌, 55(11), 845-851
- 4) 孫 珠熙(2003)ブラウスにおける衣服形態でのデザインイメージと素材イメージとの関連, 日本家政学会誌, 54(11), 925-934
- 5) 吉岡毅, 吉沢貴子, 福田晴美(1997)若い女性のポディーイメージと食行動について, 東京家政学院大学紀要, 37, 251-270
- 6) 大矢靖子, 宮川久邇子, 高田茂樹(1996)外食, 調理済み・半調理済み食品, 手作り料理のイメージとその実態に関する調査研究(第1報): イメージについて, 日本家政学会誌, 47(6), 563-572
- 7) 前田哲男(1995)住宅の居室におけるイメージとデザインとの関連について—居住空間の意匠に関する研究, 山口女子大学家政学部研究報告, 21, 45-53
- 8) 長沢由喜子(1994)生活意識が住宅地のイメージ形成に及ぼす影響: 盛岡市の新旧住宅地を事例として, 家政学研究 41(1), 39-49
- 9) 藤田智子(2010)家政学部生の「家政学」に対するイメージ, 名古屋女子大学紀要, 家政・自然編, 人文・社会編, 58, 53-60